



祖谷に橋を訪ねる

自然の風景、人間のデザイン

伊達 美徳

祖谷渓谷は橋の博物館

2005年の秋、徳島県の西、祖父(いや)渓谷をさかのぼってきた。ここは橋のミュージアムである。そういえば四国は瀬戸大橋からミュージアムは始まるともいえる。祖谷といえは蔓橋(かずらばし)が観光の名所となっているのである

から、この谷は橋の歴史博物館のごとくかと思っていたのに実はそうでもなかったが、それでもたくさんの橋を見て興味深いこともあった。

橋は、こちらとあちらの二つの世界を結ぶもので、かなり怪しいものがあることは、民俗学としてもあれこれといわれているし、社会的にも

面白いものだ。

科学技術的に見ると、自然の摂理に反しながらも自然の摂理を逆用するか、という技術の粋でもある。川の流れに直角にかけてしかも水平を求めて地形に逆らい、地球の重力に逆らって人と物を持ち上げる。だからこそ、そこに土木技術者の腕の見せ所があるし、技術の落とし穴にも陥る。

橋は人間だけが求めるものであつて、その生活に深く根ざすものでもあるから、単に渡ればよいものではない。すまなくなり、文化となつてその物体に美を求めるようになる。

ところが美とか文化になると、土木技術者には手におえないこともおききてきて、珍妙なこともおきるのが面白い、というか、困ることもある。



橋の遺跡

祖谷川をさかのぼりはじめるには、まず吉野川にある祖谷口橋(写真1)を渡る。大きなアーチをかけて鋼線で橋桁を吊っている。手すりの黄色が浮き過ぎていて気になるが、シンプルで美しい構造だ。最近の架橋らしい。

吉野川との合流地点の祖谷川にかかる橋(写真2)は対照的に朱色で、アーチから型鋼が桁を吊る。

さらに祖谷川をさかのぼれば、集落の中に昔は吊り橋がかかっていたらしく、「千足橋」と書き込まれたその橋塔だけが道端に建っていて、下

は車庫になっている(写真3)。このすぐ裏が川である。車を渡すことができないで引退して鉄橋に譲ったあ

とが車庫とは皮肉であり、タワいわが身を嘆いているかもしれない。橋の遺跡にはあちこちで出会う。

(写真16)は大歩危峡の駅の上にかかる吉野川のアーチ橋だが、よく見ると中央下辺りに昔のつり橋の橋塔遺跡が見える。かつてはここに橋がかかっていたのだ。

このような端の遺跡に出会うと、かつての道筋とその橋の景観を想い、知らない土地なのに懐かしい感慨が沸くのが不思議である。

善意の勘違いデザイン

橋の鉄骨の色彩はどのようにして決めていくのだろうか。その場の風景でそれぞれに決めるのか、その川にかかわるいくつかの橋を総合的に勘案して配色するのか、その両方なのか、どなたかご存知なら教えてください。

ここには祖谷側の全ての橋を載せているのではないが、青色(写真1、11、13上)、朱色(写真2、4、12、15、16)、そしてただひとつだけ黄色(写真13中)であった。目立たない色は茶や橙黄色だろうし、目立つ色は朱色である。全般に赤が多か

ったのは、風景を考えたデザインなのか、それとも単にペンキ代が安いのか。

コンクリート橋はさすがに地肌だったが(写真5、14、17)、ひとつだけ茶色に塗ってあった(写真8)。その茶色の橋は、祖谷の名勝である蔓橋(写真6)のすぐ隣にかかっていて、実は蔓橋を見物する目的のために作られた人道橋である。今回の旅で見た橋のなか最も醜いデザインであった。橋げたは茶色ペンキを塗り、手すりは鋳物で作った蔓橋のイミテーションデザインである(写真7、8)。あきらかにデザインという



ものを勘違いしている。

蔓橋の隣だから蔓橋のまがい物デザインの手すりとは、本物の蔓橋に對抗すべくデザインしてどうしようというのか。蔓橋を引き立てるシンブルなデザインでなければならぬはずだ。この不細工きわまる手すりが本物の蔓橋の風景を邪魔しているばかりか、河原に降りて下から蔓橋を見ると、背景にこの不細工な橋がダブって見えて邪魔なことこの上ない(写真6)。

多分、この橋のデザイナーは、蔓橋にふさわしいものにしようという善意だったに

違いないが、
こういう善意
が最も困るの
である。以前
に伊万里の大
河内山で、橋
や河川に伊万
里焼をこてこ
て使ったあつ
て、これも不
愉快になった

ことがある。

ところが、もうひとつ新たな不細工な建造物が、蔓橋のすぐ近くにできつつある(写真9)。地域活性化のための開発事業らしく、駐車場、イベント広場、物産館らしいが、祖谷渓谷に清水の舞台ができています。本物の清水の舞台は、それなりにプロポーションで木組みの迫力があり、歴史的景観となっているが、さてこの建造物は歴史に残るデザインとなるだろうか。

蔓橋を訪ねてやってくる30万人の観光客に対応する観光開発で地域

を起こそうとする意欲が上滑りして、

売り物の秘境風景を壊しているように見える。1500人の村民のための施設としての意義もあるだろうが、まさにこれは秘境のジレンマである。秘境を秘境として売れば売るほど秘境でなくなり、ありふれた山奥温泉観光地になるのだ。

美しい新しい橋

吊橋はこの蔓橋だけではなく、新しい鋼線によるものもある。蔓橋の喧騒から離れてひっそりとかかる吊橋(写真10)は、地元の人が日常的に渡るのであろう。

あたり一面の緑の中に「公園」と

いうのも変なものだが、「竜宮崖公園」とちょっと優美な名のキャンプ場にむけて祖谷川を渡る橋(写真13)は、鋼線を組んだシンブルな吊橋である。レクリエーションの場のアピールのつもりか豆電球がいつぱいまといついていたから夜はチカチカ光るらしい、うーむ、。

それでも新しい橋は、比較的デザイナーが上手になってきているようである。(写真13)には3本の橋が見えていて、それぞれにデザインは異なり、それぞれに機能が異なるよ



うだ。それなりに自然と人工物の
出会う緊張感のある風景となってい
る。

この旅で出会った橋のなかで白眉
のものは、J R土讃線車窓から見た、
吉野川をまたぐ高速道路の橋（写真
17）であった。コンクリートの桁と
アーチを組み合わせて、さながら宙
天を舞う白龍のような姿に、日本の
橋もここまでデザインできるよ
うになったかと、ちよつと感慨を催した
のだった。もつともこの形そのもの
は、外国のどこかで見たとような気が
するが、風景として快い緊張感があ
った。

（写真5）は、祖谷清水の舞台（写
真9）のすぐ右にかかる工事中の橋
である。シンプルでプロポーシ
ョンのよいPC桁の橋であるように見え
た。どうもスケール感とデザインに
おいて、あの舞台とこの橋とはつり
あわないような気がしたが、いつの
日かでき上がったものを見に来よう。

橋と秘境

祖谷川はふかいV字の峡谷が山奥
まで深く続く。こんな奥までどうし
て人々は棲むのだろうかといぶかし

く思いながら、祖谷川の橋を右に左
に渡りつつテクテクと歩きつづけて
40キロメートルも遡ると、まさに
ここの売り出し文句「秘境」の感が
沸いてくる。

歩くにつれて、橋は風景と心の新
たな展開点となる。渓谷沿いの道は
片側が森で常に暗いのだが、橋では
左右が開けて心も明るくなる。

秘境は、その昔、源氏に追われた
平家貴族の落人伝説に彩られるほど
にも深いのである。その深い山の急
斜面地を開いて、わずかな農地と豊
かな山林を糧として、祖谷の深さが
静かな閉鎖社会を築いていたのだら
う。

祖谷の
蔓橋は、
18世紀末
には13本、
20世紀初
めには8
本あった
と文献に
あるそう
だが、順



次「針金吊橋」に架け替えられて、
1923年には全てなくなつた。今
の蔓橋は観光目的に復元されたもの
であるそうだ（西祖谷山村サイト）。
実は今ある蔓橋も、蔓の中に忍ばせ
てある鋼線で吊っているのだつた。
蔓橋には、簡単にきりおとして源
氏軍が攻め来る道を開けるための仕
掛けという言い伝えがあるが、まさ
に城郭の堀をまたぐ跳ね橋のごとく、
閉鎖圏を守る道具だつたのだ。

政治勢力拡大の道具となり、交流の
流通路となり、人々が都会流出する
道となり、観光客を招く道具となる。
平家落武者のリーダー平国盛の直
系末裔の阿佐家のご当主も、東祖谷
山村の山奥にある屋敷を後にして今
は下流の大きな街で暮らしており、
ときにこの屋敷に戻っているという。
秘境は確実に崩壊しつつある。橋
はその崩壊の元凶でもある。いずこ
の秘境にも、秘境といわれたとたん
から崩壊の美学が漂う。

（051101）